

詩の方法あるいは生涯の契機

——△漂泊▽という宿命——

長野 隆

萩原朔太郎は漂泊の詩人である、という言い方には、おそらく或る種の逆説が含まれる。萩原ほど漂泊をまともに体験しなかった人は少なく、また彼ほど日常的に漂泊していた人もいない。はっきりしているのは、この人の言う△漂泊▽には、少なくとも△道▽という觀念だけは入り込んでいなかったという事実である。それが、みずから「永遠の漂泊者」（『氷島』自序、傍点長野）と名乗らなければならぬ理由であり、まさに西行・芭蕉ならぬ近代の漂泊者たる所以である。

旅△漂泊におけるこの△道▽の脱落については、実際多様な観点から論じられよう。ごく一般的な視点から見れば、萩原の生きた時代との宿命的な共鳴音の内にも嗅ぎ出せるし、また彼の出自の階級性に依拠する生活史の中からも引き出せる。或いは彼の特異な資質——その徹底した本能主義に根差す浪漫志向の裡にこそ求められるべきものであるかも知れない。しかしいづれを問題にするにしても、そこに重なる浮かび上がってくるのは、彼が人生というものを合

目的的な生の道程として容認し得なかったということであり、就中己れ自身の生の方角を生活というかたちでは仲々所有しきれなかった事実である。そこには、△子▽がやがて△成人▽し、仕事をもち、△夫▽となり△父▽となつて行く——いわば「生」の自然過程における年齢としての社会的な座位が、はじめから無視されているかの如き印象がある。萩原の人生が漂泊△旅でなくてはならぬのは実はそのためののだが、再三言うように、彼ほど漂泊を嫌った例もまれであるのだ。「生」のクロノスの時間支配を超出しようとして、萩原ほど不断に焦慮した人物も少ないのである。そこに、この詩人にしかない△漂泊▽の意味が伏せられている。その晩年に「われは何物をも亡失せず／また一切の物を失ひ盡せり。」（『乃木坂俱樂部アパートメント』）と慨嘆する彼の逆説的思弁に倣って言えば、萩原は一度たりとも漂泊せず、また常に漂泊していた——、おそらくこう仮設することによってのみ、この詩人生涯の宿命の構図は明かされるはずである。

わたしはここで、明治三十九年から同四十五年に及ぶ、彼の若き日のA放浪時代Vに焦点を据え、そこで育かれた「生」の輪郭が、図らずも思想の鑄型となって、彼の生涯の方向を決定づけて行くのを確認したいと思う。そして、それが大正二年に開始される彼の詩作の上に、「詩の方法」というかたちでどのように繰り込まれていったかを見つめてみたい。ゆえに、本稿はすでに公表した愚考「論への「序」」をなすとともに、それ（『月に吠える』）以降の展開をも示唆するもくろみをもっている。

1

萩原は明治三十九年四月に前橋中学校を卒業し、同じ年の九月に初めて前橋の家を離れる。寄宿先は東京の親戚宅（八木家）であり、ここで約一年、早稲田中学補習科に通うことになる。上級学校受験の失敗からやむなく再受験の準備を進めるために、初めて他郷に移り住んだというわけである。理屈はひとまずそういうことだが、この名目以外にも「早中補習科在籍」はそれなりの意味をもっていた。十一月に二十歳を迎える萩原には、徴兵猶予の口実を得るためにも、何かしかの「学籍」は必要であったのだ。考えてみれば、日露戦争終結直後の慌しい時代である。徴兵検査「丙種」合格の萩原にも、兵役の義務はあったのだ。したがって、進学準備のために設けられたにちがいない他郷での新生活は、より現実的には「学籍」を必要とする徴兵「猶予」の場でもあったということになる。中学校は出たものの、ぶら／＼しているわけには行かぬのだ。学業に情熱がもて

ず、どちらかといえば「夢想」に浸る時間を欲していた萩原だが、もはや身の振り方それ自体の退路さえ断たれて、忙しく旅立たされたのである。

親元をはじめ離れたこの東京での一年がいったいどういうものであったかは、残念ながら判断する材料に乏しい。だが踏みえた結果だけを上辺から見れば、間借りなりにも高等学校（五高）入学を手に入れたのであるから、適当に実りのある生活は送られていたのだろう。現に翌四十年九月、従兄栄次に宛てて「小生は今開始めて寄宿生活に入り愉快に消光まかりあり、当市の風俗は商人にても学生にても凡て撲直にして飾なく寧ろ好風俗に御座候」としたためており、五高の地熊本への第一歩を会心している様子さえ見える。ひとまず高校生になった、という喜びはあったのだろうか。しかし察するところ、この進学は外見ほどには満足の行くものではなかったらしい。栄次宛四十年四月十七日付の書簡に依れば、彼は四月に「大阪府立高等医学学校（現在の大阪大学医学部）」（萩原隆の推薦）の受験に失敗しているようであり、この事実と、当の五高第一部の語類（英文科）入学の現実とを突き合わせれば、萩原の現状は必ずしも希望通りのものではなかった。

前橋きつての名家であり、また医師としての家門を誇る萩原家の意向を押し量れば、長男朔太郎の「医科」への進学は自明の前提にも等しかったろうし、また萩原自身にしても嫡子としての責任の幾ばくかは素朴に認識し負うたはずである。つまり、A家Vとの間に何らの確執なくして「文科」進学の決断はありえず、事前の了解なくして入学が許されるはずもないのである。萩原の場合、A家V

の反対を押し切って「文科」を選んだとは考えられないし、また彼にそうするだけの意思があるとも思えない。おそらく、この五高文科入学は、「医科」再受験を頭のどこかに置いた、当面の猶予の場であつたに相違ない。A家Vとともに互いが歩み寄ることによつて得られた身分の保証とでも言うべきものである。しかし考えてみれば、すいぶん不本意なA旅V仕度を行ったものである。徴兵猶予の処置の方はともかく、早稲田中学補習科在籍の一年がはじめから進学という紐付きの猶予期間であり、その結果得られた高校への入学が、またしても進路を保留する「猶予の時」を意味したのであるから、何のための旅V進学であるのか怪しくなってくる。

そもそも萩原に上級学校進学の意欲があつたか、ということの方が問題なのである。中学卒業の時、陸軍戸山学校の軍楽隊を志望した事実はある。だがその動機といえは「軍楽隊を志望したのは、あの真赤の美しい軍服や、行軍の時の先頭に立つ雄姿などが、少年のロマンチズムを刺激したからであつた」(「音楽について」と回想されるくらいだから、いかほどのものでもない。むしろ耳を貸してもらえるところか一喝されたまだが、彼にははじめから進学する(医者になる)意思などなかつたのだ。軍楽隊入学希望は、その口実に持ち出した一時的な思ひつきにすぎまい。『月に吠える』刊行直後に記したとされる「ある人の歴史」(「ノート四」)の中で、萩原は次のようなことを言っている。

彼が田舎の中学校を卒業したとき彼の友人たちは未来の理想について語りあつた。あるものは上級の学校へ、あるものは実業につくべく、彼等の凡ては希望と幸福とに充ちてゐた。併し彼

一人は少しもそこに愉快になる理由を発見することができなかつた。／彼は思つた、「自分の生きてゐる理由が解らないで、何がどうだといふのだ。何が目的だ。何が理想だ。馬鹿奴共が。」併し彼は、周囲から目的を立てることを強ひられた。そして、不承不承に上の学校へ入学した。(傍点長野)

この記述に多少の自己弁明が働いていたとしても、大方のところは真実であつたと想像される。「永遠の退屈」(『文芸汎論』昭11・4)にしてもそうだが、ほぼ同じ内容のことが彼の生涯の中で何度か改められるからである。ともかくこれによると、当時の萩原がひとしなみでなかつたのは、己れの将来に互る職業や人生上の「目的」を何一つ所有していなかつたことにある。だから、この上「学校」に通つて勉強する意欲などもなかつたと言つていい。それよりは「教室の硝子窓から戸外の美しい芝生や空や樹木を眺めてゐた」(「ある人の歴史」)り、「一人で草の上に寝ころんで空を眺」(同)め、「白い雲のかたまりが夢のやうに浮かんでゐる」(同)る様子をぼんやり見入っている生活の方を好んだのだ。つまり「目的の喪失」には、彼の現実逃避的な性向とともに、その夢想癖が災いしていたとしか言いようがない。ニヒリズムも多少はあつたらう。しかし、それはそうとして、将来に目的がなかつたということは、萩原の場合、言い換えればA家Vの意志に抗するほどの自前の言い訳さえ見つからなかつたことを意味する。だから、たとえ「強ひられた」ものであれ「目的を立てること」とは、必然的にA家Vの意志に従ふ、ということだ。好むと好まざるに関わらず、「進学」はそのまま「医進」に方向づけられていたのである。それはA家Vの期待でも

あり、同時に束縛として彼を捉えた。「意欲」の本体は不問に付されたまま、ひとまず彼はA旅Vに発たなくてはならなかったのである。その頃の心境を表していると思われる次の一首には、A旅立つこのの本意を密かに嘆く、この人らしい生活感覚が滲んでいて面白い。中学卒業とは言っても、もうじき二十歳に手の届く「少年」の歌である。

山の上に一人家する夢を見て寝ざめの床はうるほひにけり

（「窓に寄る日」より、『脱声』明39・4）

察するに、彼は己れの態度保留をA家Vに請うているのだ。「医師」に代る将来の目的を得るまで、時の猶予を願ひ出ているのである。だがそれを申し入れるにも、自前の言い訳（己れの目的）が見つかからない。中学卒業を目前にして歌われたこの歌には、何かそんなおの、きが聴きつけられるようである。情弱な感傷と言ってしまうがそれまでだが、言葉にならぬ憂鬱が背後に燻っているように思われる。

このように見てくると、萩原朔太郎の「青春の旅」は、その出発の当初から足つきが怪しげであったのがわかる。それはいかにも他律的に方向づけられた旅であり、同時に歩き出さないわけにはいかなかった旅である。彼は旅の意味を考える間もなく、すでにその中に足を踏み入れていたのだ。しかも、ようやく踏み出したと誰しもが信じ、またそう彼も信じたい旅でさえが——即ち高等学校入学が——、無言の裡に旅（＝医進）の保留を引きうけていた。猶予の場を意味していたのである。おそらく萩原の生涯を決定づける問題はその時にあったらうと思う。つまり、常識的な提言を敢えて持ち出

すなら、この五高第一部乙類（英語文科）に入学した時点で、萩原はきっぱりと両親に家へ告げるべきであったのだ。「医科」への意欲がすでに失せてしまっていることと、これから先進んで「文科」を専攻する将来的な展望の何がしかを、強く訴えるべきであった。仮りに希望ではなかったとしても、これこそA家Vへの「言い訳」であり、みずから見出さねばならぬ「旅の目的」たりえたのだ。だが萩原はそれをしなかった。というより、できなかったのである。理由は先に述べた通りだ。晴れて高校生となり、文字通り故郷を離れたA旅Vの上でありながら、萩原の悩みは依然としてA旅Vの意味を問わなくてはならぬところにあつたと言っている。

さて小生は目下一身上に關することに就きて少しく煩悶するところあり貴兄の御高教を給はりたく存じ居り候へば近き中に此の事に関し御手紙まゐらすべく今日は此れにて擲筆仕るべく候

（栄次宛、明41・1・31付書簡）

五高入学後わずかに四ヶ月後の告白である。「煩悶」が何を意味するかは、およそ想像できる。

小生は只今少しく方針につきましては煩悶中に御座候へども今日の状態にては最早文学士となるより外に仕方なく先づ之を以て自分の運命と決定いたし居る仕に御座候尚医学を納めんとするには来年また高等学校の試験をうけなすか或は専門校の試験をうくるの二途あれども余り此の方面に気がむかず候、法科にうつらんとするの念も有之ども一年学校のおくる、恐れあり、此等の点に關して色々思索いたし居り候がいづれ御面会の際委しき御教訓をうけたくその上にて亦決心する覚悟に御座候、只

今は色々な気がちりて一意に勉強すること出来ず困り入り候又文学と法科と医学と三つのもので日夜小生の心を種々に駆りてやまされ共先づ大体は文科にて甘んづる決心に御座候、

(栄次宛、明41・3・31付書簡)

五高第一学年をほぼ半ば過ぎて来たところで、萩原の悩みは具体的になる。とにかく何のための「学籍」であるかを、みずから決さねばならぬ時期にさしかかってきたからである。注目したいのは、「医科」に進むためにはもう一年必要だと告白しているところで、これによると、少なくともこの半年の間に「受験勉強」をした形跡はない。「猶予」が浪費でしかなく、歩行が足踏みにも等しい現状を、萩原は厭わしく感じているのだ。「医科」への転身など初めから考えられていない。しかし名目上「猶予」として保存した一年(学籍)の意味はいずれ問われなければならぬから、「悩み」も具体的なかたちをとっているのである。ここで新たに「法科」と名指ししてもち出された転身への含みは、そうしたもののへの釈明の意と解される。A旅Vの目的は依然として見つかってはいないのである。むしろそれなら現行のA旅Vを本来のA旅Vたらしめたい——、「大体は文科にて甘んづる決心に御座候」とは、おそらくそうした心境を言っている。「只今は色々な気がちりて一意に勉強すること出来ず困り入り候——これはいかにも尤もな悩みである、とともに自業自得の悩みであるだろう。彼はA旅Vにありながら未だにA旅Vの「意味」をめぐる、横すべりに等しい足踏みを行っているのだから。萩原の中で、自身の「青春の旅」のかたちがA漂泊Vとして映ってくるのはそうした時である。

旅にいて旅をする人

夢を見て夢みるころ

遠き昔のうつゝをば

したいみれどさめやらぬ

夢にしあればさめやらぬ

さめぬに胸はふたがりて

知らぬ異国のいさごち

きのふは泣いでかへりけり。

先の書簡とほぼ同じ頃に記された習作の一つである。ここに示される「旅」の二重の意味は、いわばA旅Vの無意味性の上に立たされている己れの存在を言ったものだ。或いは現行のA旅Vが初めから合目的でないがゆえに、先々与えられるべき本来のA旅Vへの、とりとめのない移行過程として省みられているのである。だから「知らぬ異国の」云々も、九州熊本という土地の異国性にあるというより、A旅(進学過程)Vという場そのものへの異和というかたちで眺められている。言い換えればA旅(進学過程)Vという制度的な場自体から疎外された己れ自身の異邦人性を見ているに相違ない。ここで空間的に嗅ぎ出されている異国感覚は、まさしく「青春の旅」の意味する時間的、階梯、それ自体からはみ出している、己れの異邦人性を言ったものである。萩原が五高の地熊本にいたたまれなくなるのは、そのような時間的な停滞感覚にある。A旅Vの過程||時間を首尾よく踏めない孤立感覚から来ている。「場」の中にとり残される意味と「場」によって追いたてられることの意味——、萩原がここでA旅Vの「時間的な未解決」をその「空間的な解決」

へと向けて「場」を移動させようとするのは当然の成り行きと見てよい。未だに「学科目」——△旅Vの目的——の選択に迷っているような現実である。『足踏み』のまさしく現実的(生理的)な補償として、移動が自在である「空間」の上を歩み出そうとするのは、決して故なき行動ではあるまい。事実この年の七月に萩原は五高を一学年で落第し、待ちかまえていたように六高(岡山)受験へと赴く。建て前は「法科」への移籍という尤もらしい理屈だが、それが五高でなく六高であらねばならぬ理由などどこにも見当らない。九月、これに無事合格し、萩原は慌しく熊本を引き払うのである。萩原の△旅Vは、ここで、空間的にも△漂泊Vの条件を手に入れてしまったようである。

こういうかたちで築かれて行く萩原の漂泊思想が、いわゆる「見の旅」を軸におく近代以前の「旅(漂泊)の思想」と大きく隔たっているのは言うまでもない。そこには、「自然」にならうべく用意された△道Vの心構えなど、どこを探しても見つからない。漂泊を人生の隠喩となし得た芭蕉などには、一方で揺らぐことのない大きな「自然」が「生」をしっかりと歩行の内に繋ぎ留めていたからである。その点、萩原の△漂泊Vは貧しい。そこに思想の匂いを嗅ぎとるならば、まさしく△漂泊Vする無意味によって培われたものだと言うほかはない。そも、心理的には△旅Vを拒絶したところから△漂泊Vの構図はあったのだから。また束縛こそあれ、決して△家Vから追放されたのでもない。どちらかと言えば、愛情のつぼみの中

2

さて、五高(熊本)に見切りをつけて六高(岡山)の受験に出向いた際、萩原は同じ足で久しぶりに前橋に身を寄せるが、その折の心境を榮次に宛ててこんな風に綴っている。

宅へ帰りてみれば格別に楽しきこともなく相変らず父より小言を頂くばかりにて無為に消光罷り有候 矢張帰省の快楽は遠地にありて想像の夢にあこがるゝに如かざるを悟り申し候前橋の風光は一年前と更に変せず、今は却りて漂泊の遊子が異郷の念の痛切にして悲愁の内にかくれたるかの快楽の甘き姿にあこがれ居る次第に御座候 小生は家にある時やうやく我が活気のうせて無為と平和の中に太平の民と化しゆくことを怖れいとふものに御座候(略)帰りて二日ならざるに小生の胸中早く嫌悪と倦怠の生ずるをおぼへ申し候

(明41・7・21付)

この文面は、どのように読めばよいのか。とりだてて個人的な記述はどこにもなさそうである。或いは「常識」の一つは、これを「近代」思想の一片鱗と見てその磁場の内に練り込もうとするだろうか。いずれ似たような体験は誰にでもありそうだし、仮に無かったとしても、想像することはそんなに困難ではなさそうである。しかし私には、そうした常識的な読みを施そうとすればするほど、萩原のこの感懐のどこかに不自然なものを聴きつけてしまうのだ。例えばその「常識」の一つに做つて犀星の「小景異情」の一節——「ふるさととは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの／よしや

／うらぶれて異土の乞食かたじとなるとても／帰るところにあるまじや」——などを対置させてみれば、違いは造作なく視えてくるように思われる。「近代」にあまねく聴こえる漂泊者＝故郷喪失者の「異情」とはどこか事情を異にする、萩原の訴えを感じないわけにはいかなのである。曰く「無為と平和の中に太平の民と化しゆくことを怖れいとふものに御座候」——、これは停滞した田舎(家)の空気に對する嫌悪と自戒を言ったものだろうか。そんな中に身を埋めていては、時とともに変り行く己れ自身をさえ見失ってしまうというのか。そして「今は却りて漂泊の遊子が慕郷の念の痛切にして悲愁の内にかくれたるかの快樂の甘き姿にあこがれ居る次第に御座候」とは、まさにそのような人生の岐路に立つ「青春の矜持」を表白したものであろうか。しかし、それらはすべてさかさまである。「前橋の風光は一年前と更に変せず」——、これは萩原自身のこと、を言っているのだ。まる一年(前橋を發つて二年)をかけて△旅▽の道を歩んで来たはずの己れが、その收穫もむなしく、もと、居た位置に立っていることを堪えがたく思っているのである。たとえ「猶予」であったにしても△旅▽として与えられた「時」を徒に消費し、いわば空間の放浪を行っただけの己れの現状を、彼は△家▽と△郷里▽の眼を通してみずから嗅ぎ出しているのである。だいたいちまともな「漂泊の遊子」(?)であれば、昔に変わるところのない故郷ふるさとを見て幻滅するという道理はない。時とともに変わって行く故郷をこそ嘆くものである。故郷を發つた者にとって、顧みる故郷は常に時間的・過去の存在であるからだ。それは空間的であるよりは時間的な存在でなくてはならぬ。人間的「生」の自然過程が人と家との関係構

造を時間とともに組みかえて行くかぎり、人生＝旅が、ありし日の家＝故郷を背後に置き捨てて行くのは必然の成り行きである。だが、ここに見る萩原の帰郷からは、きのうまでの△旅▽が一向に△旅▽でさえなかつた自明の事実に対面した、字義通りの気まずさだけが伝わってくる。「宅へ帰りてみれば格別に楽しきこともなく相変らず父より小言を頂くばかりにて無為に消光罷り有候……(略)前橋の風光は一年前と更に変せず……」——、要するに、△家▽△郷里▽の方がむしろ考えを新たにし、己れを元のままで迎え入れてくれ、と萩原は言いたいのである。むろんそれが叶わぬ願いであるのは百も承知で、萩原は△旅▽なき旅人＝漂泊者の數居の高さを嘆きとっているのである。

「変らぬ風景」——それは彼自身の姿であった。「無為と平和」「嫌悪と憐愍」とは、そうした己れへの堪えがたさを言っている。あたかも「自然の時間」が季節の周期として風景を再現するように、萩原の身分は、その「身体の時間(年齢)」に見合おうともせず、一年前(二年前)の姿を前橋の風景の中に晒してしまったようである。帰郷後二日もしないうちに居心地の悪さを感じ、早くも△漂泊▽を夢見ているのは、そうした「時間」のつけを「空間」で補おうとする身体の衝動に他ならぬ。その意味では五高(熊本)で体験したと同じように、彼は前橋でも異邦人であったのだ。そしてむろん岡山(六高)に移ったところで、この現実はあるはずもなかつた。

六高(岡山)に移った萩原が、ここでまる二年、ほとんど自暴自

棄にも等しい学生生活を送ったことは周知の通りである。その原因が佐藤仲子との失恋にあったとも、或いは不運な病い（腸チフス）にあったとも、類推は幾通りも可能だろう。しかし根本的に見て、当時の萩原に勉学への意力は全くなかったと言うべきである。すではっきりしていることだが、そも／＼「文科」から「法科」に移籍した動機さえ怪しげであるのだ。彼は熊本（五高）での失敗を、みずから一段と条件を悪くして再び繰り返そうとしていたのである。

現に六高一年目の明治四十二年の五月、萩原は大阪に栄次を訪ね「医科」進学への相談をもちかけている。それも、「学校ヲ踳々ヲ逸へ行キ、医科大學ニ入」（栄次の日記）という、途方もない相談である。その真意は即座に読める。栄次自身「原因ハ独逸語ノ成績不良、到底六月ニ進級ノ見込ミナキニヨル」と書き留めているように、結局のところ「猶予」の口実なのである。（とはいえ、ドイツ語の単位を落しそうだからドイツの医大へ行きたいというつじつまは一聴に値すると思われるが。）萩原はここでも「家」の顔色を慮っている。とともに己れの将来——即ち「旅」の目的——を掴みあぐねている。かつて「文科」でしかないこの課程は「家」の希望でさえない／＼として、踏み入れた「旅」の意味をみずから不問に付してしまったように、萩原はまたしても「猶予」の意味の苦しむ替えを行おうとしているのである。それが「どろぬま」であるのは言うまでもない。この頃父密蔵に宛てて書き送った「自殺」をほのかす／＼一通の手紙には、そのような萩原の心境が多少の自己劇化をともなう痛切に訴えかけられている。彼は己れの「危険信号」を前橋の「家」に向けて発信していたのである。自業自得とはいえ、

「学籍」は最早「猶予」の自由さえ保障しかねてしまったのだ。翌四十三年（落第のため原級留年中）四月、指導教官（生田巖太郎）から直接前橋の「家」に退学をすすめる手紙が届き、萩原の六高生活は終止符を打つ。当時の心境を綴った一通の書簡を覗いてみよう。

小生帰省して始めてヘルの手紙を見大に驚き入りたる次第に御座候、然しながら今は如何とすべからず、此の機を以て、却つて、身上の一大革命を實現するやも計られず候、嗚呼深酷なる哉清盛の煩悶／＼然しこれ却つて、小生の幸福と相成るやも計られず候、／＼ヘルの言によれば *vir of spalen* は既に教師間の問題となる居る如く候へば三学期 *reit* なるも到底 *schicht nicht* らしく候、／＼小生今や決心致し候、小生の前途只こゝに三つあるのみ、／ 1. Kaufmann. 2. *Medicine Schule*. 3. *Pistol*. / 就中最後の者は最も痛切に感ぜられ候、／ 余りに不快のため小生は終日戸外を散歩いたし家に居るときは食事の時のみに御座候、（佐藤六一郎宛、明43・4・2付書簡、傍点長野）すべてがなしくすしのかたちで行き着いた結末だけに、「家」の中での身の置き場はなかったようである。就中最後の一節は、「檻」の中で生活しているような彼らしい「栗泊」のかたちが見えてくるようで面白い。親族の業を煮やした視線の中で、萩原がどのような事後処理を己れに課すかが問われるところだ。だがどうも分らないのは、何が「身上の一大革命」となり、何が「幸福と相成るや」と考えたかである。「小生の前途只こゝに三つあるのみ」として記した1.「商人」、2.「医学校」、3.「ピストル（自殺）」のいずれ

も真面目な希望とは思えぬからだ。しかも傍点をふった部分などには、楽観的、開き直り、さえ感じられる。要するに己れの身柄を「好きなようにさせてほしい」と提言するもくろみなのだろうが、それが「商人」や「医学校」とは考えにくい。ただ敢えてこの記述にこだわれば先の「ドイツの医学校」を指したのかも思える。つまり海外への留学である。しかしそれは「夢」としか言いようがない。おそらく萩原自身もどうしていいのか見当がつかなかったのだろう。念じているのはひとえに身柄の自由であり、A家Vに関与されない、「生活の場」にあったと想像される。「好きにさせてほしい」のである。しかし彼はどうか考えたか知らないが、A家Vの関与はななくとも「好きにする」ことは、やはり己れ自身をA漂泊Vの場に立たせることを意味していたのだ。

明治四十四年一月、萩原は再び前橋を離れる。青春時代最後の、東京でのA漂泊Vである。一応勉学の口実は設けていたはずだが、郷里にいたたまれず、重い身の置き所を他郷に求めた窮余の一策と言へべきだろう。この東京での生活が、『趣味』の延長線上に成り立ち、どこかA旅Vの意味さえ忘れさせるかたちで消耗されて行った形跡を、私たちは随所に見出すことができる。実際萩原にしてみれば、過去の無惨なA旅Vの記憶を清算するために発ったようなA旅Vである。旅立つことに見透しがあるのではなく、旅することのみに意味目的を見出そうとしたA旅Vであったのだ。その意味から言えば、己れの身が真にA漂泊Vの上に立っているのを痛感したのもこの時である。

五年まへの夏、希望に輝く瞳を以て此處の松林の中から、大洋の壯嚴を祝した紅顔の少年は頹唐の骸骨となって長い漂泊の旅から帰つて来た。今見る海の色にもまして青さめたるその顔色よ。

「一九一、二」の日付をもつ「二月の海」(『ソライロノハナ』大2・4)の一コマである。それにしても、萩原は何に「青さめ」ているのか。おそらくはA旅Vの無意味性——過去五年に亘る「時」の消耗と、それに伴う深刻な現実——に「青さめ」ているのだ。

「漂泊の旅から帰って来」た過去の証しが、唯一己れの「若い」だけであるという無惨な思いである。しかもまだ本来のA旅Vにさえ発っていない。A旅Vへの猶予として生きた五年の際月A漂泊が、二重の意味で来たるべきA旅Vの不可能性を生み出してしまった事実である。「時間」がひたすら生物的な意味——年齢——においてのみ彼の上のしかかっているようである。

中学校を卒業した頃から私は生の苦痛といふ事を考へ始めた、何の目的で私は生きて居るのか? (栄次宛明宛45・6・3付書簡)

萩原の場合、これは、人生が旅(の連続)であり、旅が時間を意味することに對する身体的な不安を言っている。むろん歳をとることの不安ではなく、歳しかとれていない「生」の不安である。彼は「生」の目的を問題にする前に、「生」がすでに目的(死)をもつて歩いていることを自明に察知すべきであったのだ。彼は立ち止まっているつもりでも、それは歩くことをやめないのだ。しかも彼自身は「どう歩こうか」としきりに思索していた(る)わけだから、ことは深刻にならざるを得ないのである。「何の目的で私は生きて居るのか?」——この思いに嘘が無ければ、皮肉だが、嘘が無い分

だけ永続的に「問い」は繰り返されなくてはならない。これは真理というものである。それに対して、萩原の中にはいつもたった一つの「問い」が欠けていた。「自立するにはどうすればいいか？」——この多分に手垢のつきすぎた平凡な自問が、ほとんど自明的なかたちで無視されているのである。萩原とてこの常識を知らぬはずはないのだが、それでいて知る必要がなかったところに、彼の「A家」の呪縛があった。すでに述べたように、長男朔太郎の職業が「医師」であることを家人は誰一人信じて疑わなかったのだ。また萩原自身その期待に抗するほどの自前の意思もなかったのである。したがって「自立するにはどうすればいいか？」を己れに問うことは、まず何よりも「医者にならないようにするにはどうすればいいか？」を自身に問うことから始めなければならなかった。ここに彼の哀しさがあり同時に甘えがある。つまり「猶予」こそ「自立」の方便として機能する、といった錯誤である。その一方で「猶予」を繰り返して浪費しながら、他方最後まで「医進」にこだわり続けたのは、無理からぬことでもあったのだ。萩原は「A家」への「言い訳」を用意するために、「A漂泊」していなければならなかったのである。五年という時間的漂泊は、方便であり同時に結果である。漂泊の口実が「A旅」にあり、口実の結果がまた漂泊であったのだ。「何の目的で私は生きて居るのか？」——この「問い」のすべての意味あいはそこに発している。言い換えれば、「A漂泊」の現実が構造的に、その問いかけを強いたのである。それが、ここに至って「青ざめ」た現実を突きつけたのは必定だろう。彼は五年の際月をかけて確実に青春を消耗させてきた——というより青春を捨ててきたのである。これは五

年間浪人をするにとは根本的に立場を異にしている。

不幸なのは、まだ彼が気づいていないことである。「青ざめたるその顔色」の元凶の何たるかを、まだ深刻に見つめてはいない。

どこまでも静をいとうて動を憂する私は生れながらに漂泊の運命をもって居るのではあるまいか。

（『二月の海』、『ソライロノハナ』）

これは実感であり同時に錯誤である。本当は「時間」の問題なのに、「空間」でしか捉えきれていない。間違ひなく萩原は「時間」の復讐を受けているのである。

3

萩原自身が己れの「A漂泊」に絶望しかけていたように、親族の失意もひとしなみではなかっただろう。母方の祖父八木始が栄次に宛てた以下の書簡には、そのあたりの模様詳しく綴られている。

さて朔太郎こと怠惰にこれ有り、学問を以て身を立てる事覚つかなかく、悪書生隊に加はる有様に相成り候へば、一生を誤り候ふ間、既に落伍者の一人に御座候。この上は慨然として勉学の志を確立致し候はば格別、さもこれ無く候はば、田舎に引籠り百姓になるはう安然と存じ候間、つつます存意申し出で候様、年中申し聞かせ候ふ処、不得要領の返事につき、帰国の上は両親に相談し、前途の目的を確立候様申し聞かせ候ふ処、大日本農学校へ入り、農事研究致す事に決定。入校の予備致し居り候ふ処、当三月末、入学試験前より突然発熱、医師の申すにも或

はチブスにもなるべき勢につき、回生病院へ入院いたし候処、漸次快、先年岡山にて病ひ候と同様の症にこれ有り、一時心配致候処、近日快、既に健康に復し候ふも、更に入学を失し、又々一ケ年を空費する時は、ますく老書生に相成り候ふにつき、本人の望にて慶義塾へ入学致し、去る五月より通学致し居り候。巨下暑中休にて帰郷、九月初に出京致し候ふ事と存じ候。如何にして身を立つるかと相談相糺し候ても、いつも不得要領の答にこれ有り、誠に失望の至りに御座候ふ。右に付ては、両親の心配はもとよりにて、愚者もときどき心付け致し候も、ききめこれ無く困りいり候ふ。御手数ながら貰下りも充分御心添下されたく相願ひ候

(明44・8・15付)

四月に農学校へ入れられそうになったのをかろうじて切り抜け、再び東京漂泊(慶大予科)の中に甘んじている萩原の様子が見える。しかし親族の失意と背中合わせで、萩原も前途への見切りをつけていたはずである。「ますく老書生に相成り候ふにつき」とは、萩原の実感でもある。種々の書簡を通して窺えるこの当時の生活の、徹底したディレッタントぶりには、そうした負い目、裏打ちされた窮余の居直り、さえ感じられる。

前年(43年)十月に医師津久井惣次郎に嫁いだ妹ユキ(幸子)へ宛てた長い書簡(明44・4・20付)には、兄としての現状の附甲斐無さをみずから指弾すべく演じられた、逆説的な独善が覗いていよう。その異常に楽天的な鱗舌ぶりには、窮余の顧念を生きなげればならぬ萩原の焦りが見える。それは「当時二十六歳の萩原が、じぶんの生きている時代をへ東京へ都会的なものVの仮象の空間

のなかに、あたらかぎりくりひろげてみせたパノラマのような景観を呈している」(菅谷規矩雄)。家へ故郷からも制度へ社会からも孤立したエトランゼの「生」の耽溺の場が、それら東京の風俗であり時流の文化であった。のちに「群集」を友としその中で「孤独」を、己れの慰安の場となし得た資質の大半は、この時期に養われたものと想像される。東京という街がすでに異邦人的な性格を具えていたこと、萩原のこのような手放しの近親ぶりとは、あなたがち無関係ではあるまい。萩原の居直りは、ちょうどこの街(国)の居直りにも似ていた。しかも東京が文化の顔立ちを前面にかざしているかぎり、萩原もまた孤立した己れの「場」を思想的に脚色し得たのだ。

今日は初めから日本の悪口ばかりを書いたが斯ういふ様なことが政府に知れると私は注意人物にされる(の)です、／少しでも大日本帝国を悪く言ふものは皆、露探か無政府党のように思はれて国事犯人のようにその筋の注意人物とされるのですから、今日の手紙なぞは内所々々にして下さい、／また新しい西洋大陸の近代思想にかぶれた青年は危険人物として政府は秘密探偵までつけて居ます、まるで近代人を謀叛人か革命党の仲間のように思つて恐れて居る、(略)森嶋外とか坪内博士とか有名な小説家とか云ふ少しく新しい思想のあるエライ人は皆政府の注意人物になつて居る、／今は法律があるので昔のように無闇に捕吏をさし向けることは出来ないが秘密探偵は何時も身辺を注意して居る、／これを聞いたら君もさぞ驚いたでせう、余り野蛮なのでワソのように思はれるが本当なのです、油断は

出来はしない、

こうした気負いと身振りがどれだけ自分をせつなくするかは、当の萩原が一番よく知っていたはずなのだ。大逆事件の余波を彼なりに嗅ぎとっているのだが、いかにも皮相的で話にならない。いわば「現実のどこにも出自を意味づけることができないというゆえなき、」

〔菅谷〕が、△時代思想▽の名を借りて、危機的に演じられているのである。それは、危機的であればあるほど、あたかも新聞の社会面に突出して現れる世相の先端部を拡大してみせ、△事件▽との共犯関係を観念的に結んで行く。つまり前橋の不在者証明を彼は東京でつくり出すとしているわけだが、その浮薄なアイデンティティを支えもっているのが「近代思想にかぶれた青年」に貼られた「危険人物」というレッテルであった。「油断は出来はしない」——まさに手製のレッテルを額に貼ってみせた、兄としての精一杯の気負い——自己劇である。個人の体験を社会の病理に拡大しないかぎり、△家▽での不在者証明も手にし得ないのである。己れの△閉塞▽はそのまま△時代△の閉塞▽にすり替えられ、「近代思想」という抽象性が、彼の卑小な孤独を意義づけたのである。これはいかにも逆立ちだが、逆立ちに甘んずるしか、己れのどこを省みる術もなかった。好むと好まざるとに問わず、この時から萩原が己れ個人の問題を時代的・社会的に語らなければならなくなったのは事実のようである。

近代思想といふ言葉を近頃知つて来た、近代人といふ奴は皆私の仲間、近代思想といふのは、いはゞ理智の方向に完全な発達を遂げた一種のデカダン思想であるとも思はれる、何となれば

近代思想はどれもこれも根本に於て私と同一く、懐疑の上に立つて居るもので、近代人の有して居る素質は、強い自我の發展と欲望の飽くなき満足にあるのであるから……、然し私の思想は決して文学から仕込まれた者でなくて私自身の本性がこゝに至らしめた者である、

（栄次宛、明45・6・3付書簡、傍点長野）

しかし、実際には何一つ語られてはいない。己れの現状△孤独を「個」として支えることの困難さの上に立つ、萩原の焦りが見えるだけである。また文面を見れば、言われなくとも、彼の言う「近代思想」が「文学から仕込まれた者でな」い位のこととは解る。解りにくいのは「近代」という時代の特質を、制度△社会としてではなく、「素質」とか「本性」——即ち生理的な資質のようなもの——として把握しようとしているところである。そも／＼認識的なレベルで「近代人」が計量されていれば、その中に「私の仲間」のいかに、少ないかを知ってはいなくてはなるまい。でなければ、彼の言う「近代人」とは、すでに一度「近代」を嗅ぎ出してしまった「人」の謂である。「思想」というにはあまりに直感の域を出きっていないのだ。この時代が「趣味」という雑誌を産み落としたように、彼もまた落として子である趣味の本能で、己れの△閉塞▽を時の言葉に代えたままのことである。つまり萩原は、ひたすら疎外の形式においてのみ、「己れ」と「近代人」とを、さしづめ△家▽と△国▽との類比の内々に重ねて視ようとしているのである。しかも彼の疎外△孤立△とは、その実△家▽の呪縛の形式に他ならない。すべてが感覺的であり観念的であるところに「思想」と呼びうるものの根柢は置かれていた。

正確なのは「私自身の本性がこゝに至らしめた」とする現状認識だけである。彼は言葉にならぬものを言葉にしようとしているのだから。それにしても、己れ個人に発したA家Vとの心的確執を、彼がひとたび「近代」という抽象をかざして切り抜けようとしたとき、おのずから向かい合わざるを得なくなったのがA国V||日本という途方もなく大きな単位であった。

芸術の方面に於て殊に私は西洋人と日本人の思想の根本的に異なつて居る事を発見する、／＼文学に於ては更めて言ふ必要がない、日本絵と西洋画、日本音楽と洋楽、日本劇と西洋劇、それ等の者を比較して、さて最後の結果に至ると私は何時も恐るべき一種の迷信(あへて迷信といふ)に帰着せざるを得なくなる、迷信とは何ぞ、私は自ら之を口にする事を非常に怖るしくも又馬鹿らしくも思ふ、／＼即ち私の血管には異国人の血が流れて居るに、ちがひないと言ふ事だ、

(中略)

何から何まで私の性格は西洋人と一致して居る、私の血管には彼等と同じ血が流れて居るとしか思はれない、私は日本に生活して居るといふ事が寂しくてたま「ら」ない事がある、例の迷信が嵩じて来ると益々孤独の悲哀を感じずには居られない、祖国、祖国、私は海のあなたの見知らぬ世界を私の祖国と呼んで見たい、

(栄次宛、明45・6・3付書簡)

東京でのA漂泊Vが教えた必然の帰結である。A家Vの呪縛を背後に見据えたA漂泊Vの異邦人性が、「近代」という東京の磁場を借りて、その身を「海のあなたの見知らぬ世界」——即ち「西欧」

へと駆り立てたのである。事実、この少し前に萩原は洋行を思い立っている。「此の頃四五日帰省して居ました、それは少し相談があった、めです、私は日本を去らうと思つたのです、その結果は然し大概御推察下さい」(幸子宛、明44・10・28付書簡)とあるように、実現はしなかったが、思い立ってはいる。おそらく六高漂泊時代の一時的な思いつき——「ドイツの医学校」——が、西欧という空間的な拵がりの中で、にわかクロウズアップされたにちがいない。A旅VがすでにこのA国Vの枠の中で行き場を失っていたこと、彼自身が「近代」を視野に納めようとしたことが、内心の思いを露じさせたのだ。それは「国外」であり「海のあなたの見知らぬ世界」であるだけで充分な場所である。理屈より以前に、現状||漂泊は構造的に少しも動いていないからである。「旅先」を失ってしまった異邦人||漂泊者の、やむなき倒錯である。もはや「場」との異和のみが身体を襲い、展開(猶予)の不可能性だけが現状にもたれかかっているのである。それも思想というよりは、もっぱら生理的な「異和」として受けとめられるところに、萩原なりの深刻さがある。私は全く両親からは性格上||何等の遺伝をも受けなかつたのです、自分の周囲を反り見る時に私は意外なる不思議と非常の孤独を感じるのです、私は両親や祖父父母の間にあつて全で異教徒のような趣味と性格を具へて居るのです、

(栄次宛、明45・4・27付書簡)

A家VとA国Vとに対するこのような異和感覚は、萩原の場合ほとんど構造的な深刻さであると言つていい。その詳述はあとに譲るが、ともかくA漂泊Vの結末が、このように「彼方」||「見知ら

ぬ世界」へと視線を釘付けにしたまま彼の現実を呑み、その「生」の動的な進展を阻んでしまったことは注目されなければならない。

祖国、祖国！ 私は海のあなたの見知らぬ世界を私の祖国と呼んで見たい

たしかに、萩原はこのとき、未踏の彼岸を家郷になぞらえずにはいられなかった。それは宿命的に未踏であることによつて、凶らずも現れてきた（つくり出された）故郷である。いわば旅に漂泊の終局の予感にともなつて、現実から後から忍び寄る郷里前橋の逆投影として、彼が断崖の鏡面に映し出した『幻影の家郷』である。一方に出来上がっている郷里への決定的な異和と、この無限に対極的な家郷への思慕とは、まさに二重の意味での『家郷喪失』にちがいない。しかもそれが本来的に『家郷』の呪縛の下に築かれてきたところが、立場を一層複雑にしているのだ。

空虚なる過去の放浪生活、それに私は飽き飽きした、／＼どうかして新しい生命に入りたい、もつと充実した生活が欲しい

（栄次宛、明45・4・27付書簡）

この思ひは悲痛でなくてはならぬ。今や、己れにとつての安息の場が郷里前橋を意味せぬかぎり、無限に止むことのない焦慮というべきだからである。なにか無形の檻に捕われているような焦慮のあてどなさばかりが、萩原の身体を指嚇したにちがいない。

生を憧憬する心と、生をいとふ心と此の二つの矛盾が何時まで私の心で戦をつゞけて居るのであろう、私は何時も明るい方へ

明「明るい方」へと手をのばして悶へながら却つて益々暗い谷底へ落ちて行くのである、／＼嗚呼凡ての生活が苦痛になつた、も

う長く／＼間の煩悶、それにはあきあきした、然しいよ／＼最後は近づいた、万事が解決する時が迫つた、結局それが幸福なのかも知れない……何だか情ない様な気がするが、それで一切の快楽も苦痛も忘れられるのだ……、／＼私はその日は殆んど何もしないで物置きの様な室の中へ寝転んで居た、強い力で胸を圧迫される様な苦痛、地獄の底へ沈んで行く様な絶望、涙を流すことも出来ない辛い辛い心持だ、／＼天に訴へる處もない、地に叫ぶ處もない、迫害と不可解との中に自分は全く社会から告別して淋しい旅に出で立つ……只一人で……あゝ孤独！ 孤独だ、／＼今日から二ヶ月、私の運命を支配する者は大概定つていゝ。／＼何をしに東京へ出て行たのだらう、それを言ふに忍びない、

（幸子宛、明45・5・16付書簡）

私たちはこの書簡の記述を通して、萩原終生の孤独のかたちを探り出すことができる。ほとんど決定的な『二重性』が、幾通りかの比喩とともに鮮やかに浮かび上がる。憧憬と嫌悪、明と暗、上昇と下降、天上と地下……いずれもが、なにかの無形の拘束にあらがう、解放への焦慮として、動態的に描出されているのを知らなくてはならない。就中物置きの様な室に閉じ込められている閉塞感、すべてに「告別して淋しい旅に出で立つ」遊離感、覚との併存『二重性』は、萩原の「生」をめぐりに要約している。『無限地獄』或いは『呪縛』としての漂泊とでも言うべきだらうか。それが「今日から二ヶ月」後に（注）京大受験を指す、ほぼ構造的『宿命的なかたちで固定されようとしているのである。「何をしに東京へ出て行たのだらう」——もとより自明でなくてはならぬ、自業自得の結末であ

憂愁の森

途は矢の如く直きにはすれ共

心は悲嘆の雲に閉ざれて迷路の方にと思ひ煩ふ。

太陽は木立の影にひそみて笑み輝けども

我が想は闊くして北極圏の夜の如し。

小鳥は木々に歌ひ、河流は涼しき葉影に朝の讚美歌をかなづれ

ども

我はうなだれて暗き地上のまぼろしを追ふなり、

いつまでかさ迷ひて、いつこにか我は行くらん、

憂愁の森には人の沓音なく、我が胸には来りて巣くへる鳥もなし。

思ひ出の戸は風なきに開きかあてんは微かにそよけども、
眼に入るもの、すべて荒廃の埃にすぎず

空想はあてなき空のかなたに漂ひ

希望は地獄の底にすゝり泣く

既にして我は飢へたり、勞れはてたり、

夕まぐれ、路傍に伏して叫べども

憂愁の森は深くして今は天日も及びがたし。

苦痛の針の如く悩みは鉄鎧の如く下りて責むれ共
此処は人間の来り住むべき森にあらず

されば我こそは一人なり、げに只一人……

犬の如く、のたれ死ぬとも

我が悲愁は人より人に伝ふる由もなし、

見よ、かしこに海かゞやく

憂愁の森のつくるところ……我が生命のつくるところ……

途は矢の如く直きにはせて導けり、

(栄次宛、明45・6・3付書簡より)

のちの『水島』(昭9刊)の「漂泊者の歌」を想わせずにはないこの憂愁の詠吟が、『月に吠える』はもとより「憂憐詩篇」の草創にさえ先立つ明治最末年の、萩原の青春の記録として保存されたことは注目されなければなるまい。「森」に呪縛された「旅人」のあてどなき漂泊のかたちが、彼の「生」のなんたるかを遺憾無く物語っているように思われる。この年の九月、一抹の望みをたくした京大受験(七月推定)に失敗し、ついに前橋にひき籠る。萩原は満にして二十六歳になろうとしていたのである。

さて、六年に亙る長い漂泊生活の末に萩原が辿り着いたのは他な

らぬ前橋の〈家〉であった。彼は六年前と同じ場所——つまり〈家〉の△子Vであるという元の位置——にもぐり込んだのである。両親はすでに家業の継承を津久井夫婦に委ねる準備をすすめ（前年十一月に前橋に呼び寄せていた）、長男朔太郎には「秋原家では若隠居のような位置」（菅谷）が用意されていた。長男に見切りをつけたやむなき△家Vの処置であり、秋原本人においては甘んずる他ない、旅||漂泊の無惨な結末である。「定住」は図らずも約束されたが、「場」に対する構造的な異和は、未だ解消される見込みのないまま「場」の中に封印されてしまったのである。六年に亘る旅||漂泊が、一方で己れの将来を「選択」する場としてたれ、またもう一方で「選択」猶予の口実として手段化されていたことが、ここに至ってその猶予の期限切れに伴い、「選択」の意味さえ根底的に奪いとつたようである。それは「結果」だけが残った世界である。彼が敗残の身を寄せ、△家Vがやむなく引きうけたこの現実を、「結果」でしかなく、「今後」という観念を与えない世界であった。彼はいわば「こども」が「おとな」になって行く過程||旅を過ごした結論として△家Vの△子Vである元の位置に辿り着いたのだ。自身を委えて行かねばならぬ「時」の、試練の皮肉な教えとして、△子Vである己れ自身を踏見させられたのである。しかもその△子Vの身体は元の「こども」ではない。得るべきものを失い、逆に得ようとは思ひもせぬものを身につけてしまったのが旅||漂泊の結末である。残酷なのはそれが永遠に「結果」であって、今後のやり直しを構造的に阻んでいることである。自業自得とはいえず、深刻さは量り知れない。△旅Vの目的は未だに得ておらず、また人一倍その△旅Vに焦がれ

ていたのが当の秋原自身であったからだ。

通常ひとは歳とともに己れを変えて行かねばならない。「生」の自然過程の鉄則として、歳（||生きてきた時間）に見合った何がしかの社会的な座位を決定づけて行かねばならぬはずである。それが所定の場||空間に己れを固定し生かしようの唯一の条件である。己れの占める「生」の時を制度的||社会的な位置に符丁させぬかぎり、その人は「歴史」から弾き出される。人生が旅であり、その旅がまた△道Vでありうるのは、そうした時の、指標を己れの「生」の歴史の上に、制度的な意味として刻みつけることができるからだ。それは、△子Vがやがて△成人Vし、仕事をもち、△夫Vとなり△父Vとなっていく自然過程の、とりわけ人間的な「意味」として返り見ることができる。ところが秋原の場合、その年齢の指標となる社会的な座位は、権利とともに棄てられたに等しい。六年間の△旅Vはすべてがさかさまであり、むしろ「歳」に符丁する一切のものを棄てるために辿って来たようなものである。当然棄てようと思っただことではない。得ることの意味を考えている内に、時の方がそれを棄てさせたのだ。もはや戻ってはならぬ所に秋原は漂着したのである。

例えば、その漂着後まもなく書きためられて行く初期詩篇の中に、「若い」と「若さ」とが奇妙なとり合わせのもとに映し出されているのも、前橋の△家Vの中の△子Vとして甘んじている己れを省み、嘘の無い呟きであったにちがいない。

年ひさしくなりぬれば

すべてのことは忘れはれたり

むざんなる哉

かばかりのよもほしにさへ

涙も今はみなもとをば忘れたり

人目を忍びて何處いどこに行かん

感ずれば我が身も老いたり

(「暮春詠嘆調」、『上毛新聞』大2・10・4)

若ければその瞳も悲しげに

一人はなれて砂丘を降り行く

傾斜をすべる我が足の指に

くづれし砂はしんしんと落ち来る。

何故の若さぞや

この身のかげに咲きいづる

時無草もうちふるへ

若き日の嘆きは貝がらをもてすくふよしもなし

(「浜辺」、『創作』大2・11)

これを見ると「老い」と「若さ」のアイロニーは文体に詩想にも影を落としているように思われる。制度上はもとより実質的に△子Vを生きねばならぬ萩原には、あの「憂愁の森」の「旅人」の詠吟さえ奪い取られたのであろうか。或いは「旅立つ」前の二十歳はたちの日に、現在△老いを重ねずにはいられなかったにちがいない。

それにしても、このような萩原が△家Vの厄介者でないはずがないだろう。通常厄介者は追放されるしかないが、△家Vにしてみれば、

ば、恐らく追放(△旅)の意義さえ奪われていたのである。△旅Vをさせればまず△厄介になって行く無為な我が△子Vを見てしまったからだ。△家Vはその愛情ゆえ——即ち△旅Vの無意味性ゆえ——彼を△子Vとして迎え入れ、彼の方は失意と未練のゆえ——即ち未だに△旅Vを了えていないがゆえ——みずから△子Vの位置に甘んじた。これを客観的に見れば、奇食の権利と引き替えに△家Vは、萩原を△家Vの中に追放したのである。そして萩原は△子Vであるがままに△家Vの中の漂泊に服した。ここで萩原の「異和」は、構造的に、「場」に定着する。

実際私は退屈した。しかしヴァン・ゴッホと同じやうに、私は自分の退屈に腹を立て、絶えず苛々して気をもんで居た。何でも好いから、私は「仕事」が欲しかった。自分がもし、興味と熱情とを持ち得る仕事か、この世の中に有つたとしたら、どんな賤しい下等なことも好いと思つた。仕事や職業を持つてゐる人が、すべてみな羨ましかつた。街を歩けば、巡查や商人が羨ましく、汽車に乗れば、車掌や鉄道工夫が羨ましかつた。郵便配達夫のやうなものでも、自分よりずつと偉く、立派な羨ましい人に見えた。何もしないでころころして居るといふことが、人生でいちばん悪く、人間としての屑であり、恥すべきことこの限りであると思はれた。

「僕を市役所の小使にして下さい。」

と、たうとう或る時、たまりかねて父にたのんだ。

「馬鹿ッ！ そんなことが——見つともなくて出来るか。」とたまたち父に一蹴された。町の名門であり、立派な紳士と

して知られた父は、すくなくとも家の体面を汚さぬ態度で、相当の仕事を持つことを私に望んだ。しかし学歴もなく才能もない無能の私に、到底そんな地位は及び得なかつた。たうとう父はあきらめて言つた。

「お前は一生餓ひ殺してやる。下手に会社なんかへ勤めたがるな。仲間つき合ひの酒をおぼえて、放蕩者になるぐらゐだ。何も為ないで好いから、成るべく金を使はないやうに、それだけ一生気をつけて居れ。」

父は私を真から愛し、生涯私のことを心配して居た。生活的に無能力者である私が、自分の死後にどうなるかと言ふことは、死ぬまで父が心を痛めて居た憂慮であつた。さうした父は、愛の反語の表現として、しばしば辛辣に私を罵倒した。その皮肉な毒舌は、反語であることが解つて居ながら、いつも私を口惜しからせた。實際また父としては、最後の望みをかけて居た一人息子が、賤人同様ののらくら者になつたことを、あきらめ切れず口惜しかつたにちがひない。それはたしかに、反語以外の深刻な意味もあつた。

私は退屈のやるせなさから、絶えず色々なことを空想して居た。實際私の中には、活動力があり余つて居た。その上にまた、漠然たる熱情が不斷に私を駆り立てて居た。何か知らないが、私は常に仕事をしなければならぬところの、烈しい衝動に駆られて居た。しかも自分の信念と興味とを以て、自ら當らうとする仕事の対象が何處にも無かつた。私は音楽が好きだつたし、美術も文学も好きであつた。しかしそれらの一つとして、私に

「仕事」といふ觀念をあたへなかつた。芸術といふものは、何かしら肉体がなく、虚妄で頼りないものに思はれた。もつと実質的で、生活の現実感を持つてる仕事を、宇宙の或るところかに、私は漠然と夢みて居た。

さうした退屈の焦燥から、私は一刻も家に居られず、狂人のやうに苛々して、毎日戸外を馳け廻つて居た。全くそれは「歩く」のでなく、「馳ける」といふ言葉に近い歩行であつた。小さな狭い田舎町を、一日の中に三回も歩き廻つた。

（「永遠の退屈」、『文芸汎論』昭11・4）

少し長い引用だったが、これが前橋漂着以降の萩原の「生」のあたりである。予想した通り、彼は△檻▽の中で△漂泊▽している。しかも△檻▽を開ける△鍵▽が「仕事」にあり、その「仕事」を求めんとする不斷の焦燥が△漂泊▽を意味しているところがいかに興味深い。「仕事」とは無論、彼自身の年齢に符、丁、する、何か、の、社会的な、座位、を指す。本来であればとうに得ていなくてはならぬ、△子、▽に、あらざる、己、れ、の、座位、である。ゆえに——「お前は一生餓ひ殺してやる」——この言葉の深刻さは、眞実彼を呪縛するものが、和合的に設けられた「家族構造」そのもの——窮余の一策それ自体——にあつた、という事実根差していよう。いわば「老い」に向かう坂を登りながらいつまでも「若隠居」たる己れの位置を動かすことのできぬ背理である。「空間」ではなく「時間」によつて構造づけられた△檻▽の抑圧である。何度も言うように萩原は「時間」に復讐されているのである。

Time is life I Time is life I 私は常どちり繰返して居た。

人生の一瞬時間も、私にとつては貴重なものに考へられた。しかも今日に至る迄、遂に何一つ為すところなく、時計の指針を眺めながら、人生を浪費してしまつたのである。「無限の退屈」と「不断の焦燥」これが実に私の一生の運命だつた。

(「永遠の退屈」)

ここで「眼」と化してしまつた△時間意識▽が炙り出しているものこそ△檻▽の構造それ自体である。もとより萩原がここで視ているのは、己れのvariety、なさと己れのvariety、易さである。一方は、人生を旅△時間として歩みながら未だ△子▽の位置を出ない己れの「生」を嗅ぎ出しており、もう一方は、逆に△子▽にありながらいよいよその位置を遠去かつて行く己れの身体の時間を意識したものだ。そして、前者が「無限」なり「永遠」の感覚として、後者が「瞬間」なり「不断」の受感として、みずからの「生」を存在論的に約言しているのは確かなようである。

この「永遠の退屈」というエッセイが萩原の晩年に書かれ、巨視的には彼自身の人生を意味づける全景のように描かれつつ、徹視的には大正元年あたりの前橋漂着直後の状況を映し出しているのは注目されていい。ここに描き出された「生」の類型こそ萩原の人生の変わらぬ構図であつたのだ。そして無論、詩作の構造そのものと言つてよいものである。「何か知らないが、私は常に仕事をしなければならぬところの、烈しい衝動に駆られて居た。」と語るところには、一切が「仕事」の觀念を与えぬままにも、萩原にとつての詩作△表現が「生」ののっぴきならぬ必然のもとに突き動かされて行く事情がほのめかされている。したがつて「もつと実質的で、生活の

現実感を持つてゐる仕事を、宇宙の或るどこかに、私は漠然と夢みて居た。」とは、すでに述べたように、彼の「生」の問題に立つてゐると同時に、その想像力の遺憾無い奔出をともなつて詩作△表現そのもののヴィジョンに重ねられて行くべきものであつた。視ることが出来ないがゆえに視え、関係が断たれてゐるがゆえに関係を補償するものが想像力であるとするように。顧みれば、その若き日の△放浪▽のはじめ(五高の落第に伴つて六高受験へと赴いた際一時的に前橋に身を寄せたが)、萩原は榮次に宛てて「小生は家にある時やうやく我が活氣のうせて無為と平和の中に太平の民と化しゆくことを怖れいとふものに御座候」(明41・7・23付)と述べ、続いて、

小生は今迄詩を作らんがために詩を作りたること一度もあらずしかも帰省の度毎に詩を作らんがために詩を作らんとすること少なからず、かくの如きは明に我が性の墮落を示すものにして煩悶なく憂慮なき平凡の生活は余をして、詩の郷原たらしめんとするにあらざるか、(傍点長野)

と書き記しており、この時すでに△檻▽の中で△漂泊△のかたがそのまま詩作の原動力となつてゐることを表白してゐるのである。いかにも不幸な(?)環境ではあるが、前橋の△牢獄▽は紛れもなく詩の錬金の室でもあつたのだ。それは徹頭徹尾自身の「生」に根差した裸身の表現△詩作であつた。「不断の焦燥」はそのまま文学△詩作に直結してゐたのである。のちに大著『詩の原理』(昭3・12刊)の中で再三強調される「生活のための芸術」という言葉には、確かに寸分の虚飾すらなかつたようである。

そして更に言えば、萩原の表現△詩は「生」に膠着してゐるばか

りでなく、背後で彼の「身体」にまでも膠着していたのである。なぜなら、彼がA家VのA子Vである宿命の内側からA子Vにあらざる己れの座位を求め焦がれんとすることは、その取り返しのつかぬ現状の空転の中で——つまりすべてが「結果」であって「今後」という觀念を育くまない現状にあつては——畢竟A再生Vを祈念するにも等しかったからである。すなわち、生まれ変わり、あるべき己れの人生を取り戻さんとする、時間、歴史の復権こそ、悔恨と祈禱に日々心身を賭すこの人の唯一の願望となり得たのである。後ににわかにか明かされる特異な生体表現も、その発生の根拠を辿れば、このあたりに帰着する。それは、いわば不可能性の中にあるながら「祈禱」に身を伏せて視ようとした自己奪還の心的ヴィジョン——A像Vの如きものであつた。また事実当時の萩原にとつて、音楽と詩作以外にみずから向かい合うべきものは何もなかつたはずだ。音楽が忘我のなぐさみを音の直接性で補償してくれるとすれば、悔恨に裏打ちされた「生」の不安定は、思想、言葉をもつて乗り越えるしかなかつたのである。己れのゆえなき異邦人性を何がかの「場」に繋ぎ留めるためにも、詩作、表現は必至であつたのだ。A自己再生Vへの無限な思いをこめて、萩原の詩作は開始されて行つた。これが、大正二年五月号雑誌にはじまる「愛憐詩篇」の草創である。

5

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新らしき背広をきて

きまゝなる旅にいでゝみん

汽車が山みちを行くとき

みづいろの窓によりかゝりて

われ一人うれしきことを思はん

五月の朝のしのゝめ

うら若草のもえいづる心まかせに

日常をすでに旅人として過ごしている人には、この方途なく走りつづける「汽車」の客室こそ唯一の安息の場たりえたのであろうか。移動する空間がむしろ「静」を繋ぎとめ、あるべき本来の日常、平安を育くんでいる。彼はいまA旅Vにあるようであつて、実際には自分の個室をそこに見出ししているのかも知れない。旅装——「新らしき背広」——に身を包まずにはいられないのも、おそらくそのためである。誰の眼を通して明らかな旅人の姿を己れ自身に冠することに、はじめて眞の己れを取り戻そうとしてゐるのだ。

旅装はきつと普段着の気楽さを彼に与えたことだろう。このA旅Vの気分が字義通り「きまゝなる旅」の上にあると仮定し、また萩原自身を「汽車」の客室に安坐する一人の旅人に喩えるならば、だいたい以上のように見ることが出来る。

しかし、ひとたび車中の人から行業の自由を奪い、このA旅Vの、行方をまともに問いかけるならば、事情は多少複雑になつてくる。

まさに「うら若草のもえいづる心まかせ」に、彼方、としか言ひようのない自身、不明の座位を求めて焦慮する萩原の情動を見ないわけには行かない。故郷にあつて異邦人たらねばならぬ萩原には、すで

に述べたように、この無限に彼方の世界「ふらんす」とは、おのが「再生の場」であるとともに「幻影の家郷」を意味していた。「祖国、祖国！私は海のあなたの見知らぬ世界を私の祖国と呼んで見たい」(栄次宛、明45・6・3付書簡)——たしかに彼はこう叫んでいた。それは、与えられるべき安住、再生の場であるとともに、見出されるべき安息、帰郷の場でもあったのだ。漂泊一身のアイデンティティーを繋ぎとめる彼岸の母国こそ「ふらんす」(≪外国≫の暗喩と言ふべきである。そうした二重の意味での「家郷喪失者」の行方を、この「汽車」は探し出そうとしている。無限に対極的な二極の中間で、「汽車」は方角を見失っているのである。彼の置かれた「生」の位相があらゆる意味で矛盾、二重性をはらんでいたように、「汽車」はいつもダイアグラムを無視して走り回るしかなかったのだ。この作品から遠く愁の首階とともに郷愁の響きを聴きとる読者は、おそらくそうした「汽車」の汽笛に耳を傾けているにちがいない。そうすると、「新らしき背広」——すなわち「洋服」への身支度とは、「彼岸の母国」に己れ自身を結びつける擬態としての自己同一化を意味しているとも言えよう。「汽車」の行方と同様、旅装、洋服もまた二重の着心地を秋原に与えたはずである。あたかも「近代」という時代の二重性をさかさまに身纏うように、このとき秋原は倒錯によって凶らずも時代、近代の陰画の方へと歩み寄っていたのである。彼がそのことに気づくには今しばらく時間がかかる。少なくとも「きままなる旅」が夢想の裡にも視え、「一人うれしきことを思」う日常の束の間が存在するかぎり、この愛憐の詩情に時代の「闇」の影はまだ深くおちてはいない。

さて、それにしても、この詩篇に溢れる「愛憐」の感傷は何だらう。ほぼ一年前に書かれた例の「憂愁の森」の沈鬱さとは打って変わった、奇妙な若やきが感じられはしないか。「愛憐詩篇」冒頭を飾る「みちゆき」六篇への、素朴だが最も重要な疑問である。すでに前章で示唆しておいたが、ここに、過去六年に互る無為の「旅」の深刻な意味が伏せられていた。すなわち「みちゆき」六篇の試みとは、当時満二十六歳の秋原が、むしろ二十歳の日の旅立ちを今再び迎えようとする心情の裡に、絡めとろうとしたものであった。再度「家」の「子」の位置に舞い戻った己れの現在から否応なく発せられた、未然の「旅」への憧憬の如きものだ。前橋での第一声は、その意味で、悉く二十歳の日の心情に重ねられずには済まされなかつたはずである。過去六年の無為、漂泊に関する時間的な借りを残したまま、「愛憐詩篇」は開始されたのだ。それが、これらの作品に漂う「あやめ香水の匂ひ」(「純情小曲集」自序)の正体であり、年齢に符丁せぬ詩想のありかである。時間意識の問題としてみれば、予感としての「未来」がそのまま追憶としての「過去」の裡に蘇る仕組になっている。つまりここでも、「遠愁」が「郷愁」の裡に育まれてくることになる。「愁」を乗せた「汽車」は、依然進行方向に矛盾、二極性を訴えたまま走るしかなかったのである。また、この感傷の「旅」が、一方で「みちゆき」と標題して語り出されるのも、決してゆえなきことではないのである。現在(二十六歳)の春が無意識にか在りし日(二十歳)の春に重ねて視られるとき、「悔恨の時間」はそのまま自己奪還の心的モチーフとして、あるべき虚構の上に青春を蘇らせようとしたにちがいない。

ありやけのうすらあかりは
硝子戸に指のあとつめたく
ほの白みゆく山の端は

みづがねのごとくにしめやかなれども

まだ旅人のねむりさめやらねば

つかれたる電燈のためいきばかりこちたしや

あまたるきニスのにほひも

そこはかとなきはまきたはこの煙さへ

夜汽車にてあれたる舌には佗しきを

いかばかり人妻は身にひきつめて嘆くらむ

まだ山科は過ぎすや

空気まくらの口金をゆるめて

そつと息をぬいてみる女こゝろ

ふと二人悲しさに身をすりよせ

しのため近き汽車の窓より外を眺むれば

ところもしらぬ山里に

さも白くさきて居たるおだまきの花

ここで、夜行列車による「旅」の具体性が「道行」の仮構性を補償していると言えば、穿ち過ぎだろうか。「汽車」の行先が絞られていた分だけ、反って私には「道行」が虚構に見えて仕方がないのだ。「人妻」という具体的な暗示の仕方にしてもそうである。この夜行列車は彼が高校時代（五高・六高時代）に何度も利用した「汽車」に相違ないし、「人妻」は佐藤伸子を指しているにちがいない。だがそのことと「道行」の信憑性とは、とりあえず無関係でなくて

はならぬ。例えば「みちゆき」の中の一篇「こゝろ」には、「あゝこのこゝろをばなにとへん」といふ、

こゝろは二人の旅びと

されど道づれのたえて物いふことなければ

わがこゝろはいつもかくさびしきなり

という具合に歌われているが、まさにそういった孤独な「旅」の中で交わされてきた萩原内面の「対話」が、「二人の旅人」→「道行」という虚構を生み出したのかも知れない。とまれ、みずから「青春の旅」の途上にあつた日の、それを蘇らせる「汽車」の客室の風景の中に、往時の恋人（というより萩原にとつては今もその対象たりえた）伸子を同伴させたい心情については、充分すぎるほど理解できるのだ。それよりも、なにゆえに恋の相手が伸子（エレナ）に限られ、これ以降異様なまでにその不倫の恋に身を焦がさなければならなかったかということの方が気にかかる。むろんすべては萩原の記述を通して教えられる現実にはすぎぬが、その事実関係の考証ではなく、モチーフとしての「不倫の恋」への異様な執着ぶりに興味はなせないのである。

要するに、萩原が中学卒業時の恋人伸子に執着せざるを得ないのは、彼にとつて過去六年の経過＝漂泊というものが、青春の「旅」——学問と仕事を身につけ一人前になる過程——への「猶予」でしかなかった現実と呼応している。萩原にしてみれば、みずからの「幻想」を歩行るとともに変容させる時間＝歴史など無いに等しいのだ。未だに「旅」を夢みるのと同様、恋＝幻想の成就を夢みる位置にとどまっているのである。それは、伸子の方が六年を確実に歳と

ともに歩み、みずからの歴史をつくり上げて来ている——結婚し人の妻となつてゐる——ことに較べれば、面白いばかりの格差である。萩原にとつて、現実的な失恋(仲子の結婚)とは全く無関係に、対なる△幻想▽領域は六年前を一步たりとも出てはいなかつたのだ。別な言い方をすれば、仲子が「人妻」であることは、外なる問題でしかなかつたのである。彼は六年前の情況に対して謂わば共時的に愛情を育くむことができたし、また育くまざるを得なかつたのである。ここに、仲子へのおもひの源がある。

或いはこう考えてもよいだろう。そも／＼恋愛(初恋)とは、他者に向かい合い、他者によつて視つめられる、おそらく最初の体験の一つである。それは自己というものを初めて△家▽の外に、発見する、人生上の決定的な契機を意味している。言ってみれば共同体内の「個」として己れを再確認する、心理的な自立の体験である。

「結婚」はその制度的な宣言であり、結論である。しかるに、萩原の来歴というものを振り返つてみると、彼を一人の個人として等身大に見つめ得たのは仲子、だけであつた、という言い方が可能になる。認識の都合などではなく、交わされた△幻想▽の真実において、この事實は否めないのだ。たぶん萩原の恋狂いも、そこに原因があつたはずである。何度も述べてきたように、前橋に漂着した萩原が何よりも欲していたのは、△子▽にあらざるおのが年齢の符丁——すなわち何がしかの社会的な座位——である。組み替えのきかぬ△家▽の構造の中で、彼の焦慮とは、ひたすら制度的な「おとな」をつけることにあつたと言つていい。その萩原が以前にもまして仲子との△幻想▽を身近に置こうとしたことは、無理からぬことのように

に思われる。単に最愛の人、と言うのとは少しずれたところで、仲子との恋は不可欠であつたのだ。いわば、萩原の△幻想▽は心理的に「制度」を志向してしたのである。人並みの性欲や尋常な恋愛感情を無視できないのと同じように、より本質的な意味で、萩原が仲子との間に視ていたのは「結婚」であつたと言つていい。むしろ彼がそれに気づくわけがない。彼はただ、以前に変らぬおのが身の不幸を時の試練と思ひなし、代りに俄に再燃した恋の懊悩を不変の「意味」として△幻想▽自体の中へ繰り込もうとしただけだ。したがつて仲子が「人妻」であつたということは、それがすでに制度的に意義づけられた「女」であることにおいて、人倫的な危機感はずつたにしても、萩原なりの△幻想▽を育む上では寧ろ恰好の「他者」となり得たと言つてもできるのである。仲子(エレナ)への思慕が理屈抜きであつたのは、このように、萩原の置かれた現状そのものの構造に深く根差してゐたように思われる。

以上のように、大正二年五月号雑誌を起点とする萩原の詩作が「みちゆき」と標題して開始されたことは、いかにも示唆的であると言わなくてはなるまい。それは、まさに「道行」の不可能性を自明の前提に置いた、それ(＝道行)への、不断の思いとして、当面の詩作の方法を構造的に決定づけていたのである。監禁の内にある△旅(漂泊)▽と△性▽の動態的モチーフ——それが心理的には△自己再生▽と△家郷探索▽への自同律的ウィジョンを孕んで推進されるのが「愛憐詩篇」後続詩群であつた。

その人生論的懊悩は、はじめから解消される見込みの無いまま、

彼の身体に日々時間的な「意味」を問い質しつつ、無限に膨らみつつけて行ったようである。

ああ クオヴァジス！ 地球を飛んで、詩人は何処の世界へ行けば好いのか？ 私はいつも追はれるやうに、半ば馳け足で町を性急に彷徨して居る。忙がしく、あわただしく、そして永遠に退屈な人生！ 退屈な人生！

（「永遠の退屈」、『文芸汎論』昭11・4）

こうした宿命論的な慨嘆がよもやその晩年にまで繰り返されようとは、「みちゆき」の詩人は、思ってもいなかったにちがいないのである。

付 記

「詩の方法……」と大見栄を切ったこの稿が、先回まで連載してきた二つの愚論の「序」を為すことは初めにも述べた通りである。また、時間と紙面の都合上（ノートを残したまま）、大正二年あたりの「愛隣詩篇」に辿り着くのがやっとであったが、文中の其処此処で触れてきたように、本稿（及び先行二論文）の試みが在来の萩原論に対する根本的な批判を為しているの言うまでもない。それを逐一ここで明示する必要はあるまいと思う。

※ テキストは『萩原朔太郎全集』（筑摩書房）、及び『若き日の萩原朔太郎』（萩原隆著、筑摩書房）に拠ったが、旧漢字等はできるだけ新字体に改めた。また表記上明らかに誤字と思われるものについては、適当に正しておいた。（1985. 5. 10）